

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 7 年 6 月 11 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究

研究期間：2022～2024

課題番号：22K13147

研究課題名（和文）留学生のニーズを反映した話題リストとコーパスに基づくタスク教材の開発

研究課題名（英文）Corpus- and Needs-Based Development of Task-Based Teaching Materials for International Students

研究代表者

小口 悠紀子 (Koguchi, Yukiko)

広島大学・人間社会科学研究科（教）・准教授

研究者番号：70758268

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：タスクベース型の言語指導では、学習者のニーズや実際の場面に即した話題とタスクが重要である。本研究では、留学生を対象にニーズ調査・コーパス分析を行い、話題リストやタスク教材の開発・実践を行った。その結果（1）学習者が好む話題として「旅」「食」「夢・将来設計」が選ばれた。（2）教師は話題別コーパス『J-TOCC』や『話題別日本語語彙表』を用いることで話題に関する語彙を優先順に提示したり、会話の実例を土台にタスク教材を作成可能であることを示した。（3）実例を活かしたタスク教材が学習者の動機を高める一方で、AIの活用や文化的ギャップへの戸惑い等、多様な要因がタスク達成に影響することも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

（1）タスクベース型の言語指導を行うには「話題」と「タスク」が不可欠であるが、現行の日本語教材では「タスク」内で提示される語彙・文法が実際の言語運用に依拠するものではない。本研究では、ニーズと話題と実際の言語運用の三者を関連づけたタスク教材開発の事例を示した。

（2）タスクベースの言語指導は、これまでどのようなタスクデザインが言語習得を促進しやすいかという研究が多数なされてきた。一方で、本研究では、学習者が遭遇するタスクや困難に感じるタスクには多様な社会的文化的要因が絡んでおり、今後の教材作成においてはこうした側面も考慮した教材を作成する必要性があることを新たな視点を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In task-based language instruction, it is essential to design topics and tasks that align with learners' needs and real-life situations. This study conducted a needs analysis and corpus-based investigation with international students, leading to the development and implementation of a topic list and task-based teaching materials. The findings revealed that (1) "travel," "food," and "dreams/future plans" were selected as preferred topics by the learners; (2) teachers can utilize topic-specific Japanese corpora such as J-TOCC and the Topic-Specific Japanese Vocabulary List to prioritize vocabulary and develop task materials grounded in authentic conversational examples; and (3) while task materials based on real-life examples enhanced learners' motivation, various factors such as the use of AI and difficulties in navigating cultural differences were also found to influence task performance.

研究分野：日本語教育学

キーワード：タスク TBLT ニーズ コーパス 話題

1. 研究開始当初の背景

第二言語習得研究の立場から、留学生を対象とした日本語教育ではタスク・ベース型の言語指導が推奨されている。タスク・ベース型の言語指導を行うには「話題」と「タスク」が不可欠であるが、現行の日本語教材で扱われる「話題」は母語話者が選定したものであり、学習者側のニーズが無視されている。加えて「話題」に沿って「タスク」内で提示される語彙・文法も、実際の言語運用に依拠するものではない。コミュニケーション能力育成において、学習者の動機付けを高め、習得を促進するためには、学習者のニーズに基づく「話題」リストを作成し、実際の言語運用を活かした「タスク教材」の開発が急務である。本研究は、留学生へのニーズ調査とコーパス調査に基づいて、「話題」リストの作成、「話題別タスク教材」の開発、及び、教育実践を行う。その成果として 話題リスト、 話題別コーパス、 話題別タスク教材の事例を提供し、留学生の効率的な語彙・文法習得支援を実現する。

2. 研究の目的

留学生の効率的な語彙・文法習得の支援を実現するため、「話題別タスク教材」の開発、および、実践を行う。その成果として、留学生のニーズを反映した 話題リスト、 話題別コーパス、そして、コーパスからの知見に基づく 話題別タスク教材を提供する。

研究課題は以下の通りである。

研究課題 1) 大学・大学院に在籍する留学生の動機付けを高める「話題」は何か。

研究課題 2) 日本人大学生がある「話題」で会話するとき、どのような語彙・文法形式が特徴的に出現するのか。

研究課題 3) 研究課題 1、2 に基づき作成した「話題別タスク教材」は、計画通りに機能し、学習者の動機を高めるか。

上記の成果に基づき、より現代の学習者のコミュニケーション・ニーズに即した教材を追求するため、研究課題 4 を追加で実施した。

研究課題 4) 漢字圏出身の学習者が、留学生活において遭遇するのはどのようなタスクか。

3. 研究の方法

研究課題 1 は、日本国内の大学・大学院に在籍する留学生 13 名に、話したい「話題」についてアンケート調査を実施した。抽出された上位 8 話題を主な話題として重み付けを行った。

研究課題 2 は、日本語母語話者のコーパスから、話題ごとに特徴的な語彙や文法を抽出した。本実践では、各話題において特徴的な語彙を探るため、『話題別日本語語彙表』(中俣他 2021) を利用した。

研究課題 3 は、各話題に特徴的に出現した語彙や文法をふまえた「話題別タスクシラバス」および、「教材」を作成し、それを用いてタスク・ベースの指導を行った。

研究課題 4 は、漢字圏から来日後の留学生 23 名に対する質問紙調査、うち 19 名が来日後半年で遭遇したタスク記録、さらに 9 名に対する半構造化インタビューを行った。

4. 研究成果

4.1 研究課題 1 に対する成果

研究課題 1 は、日本国内の大学・大学院に在籍する留学生 13 名に、話したい「話題」についてアンケート調査を実施した。抽出された上位 8 話題を主な話題として重み付けを行った。

表 1 学習者が学びたい「話題」に関するニーズ調査結果 (n=13)(小口 2023:233-234 表 1)

話題	第一希望	第二希望	第三希望	換算
旅行、世界遺産、名所紹介	5	2	3	22
食ること、料理	5	3	1	19
夢・将来設計、目標	2	2	3	13
住環境、家探し	0	3	1	7
ファッション、服選び	1	1	1	6
結婚、性格や価値観があう	1	0	1	4
グラフを読む	0	2	0	4
天気、行事、季節	0	0	1	1

結果は表1の通り、上位3つの話題(「旅行」「食べること」「夢・将来設計」)の人気が特に高かった。まず、「旅行」については、学習者から「自身の専門と関わりがある」「趣味として興味がある」「コロナ禍の影響で日本に行ったことがないため、日本について知りたい」といった理由が挙げられた。また、「旅行に頻繁に行くので、実際に使える表現を学びたい」「このクラスにはさまざまな国から来た学生がいるので、互いの国について学び、話すことが日本語学習の良い機会になる」「歴史的で美しい場所に魅力を感じる」といった、多様な動機が示された。

次に、「食べること・料理」については、「食は生活にとって重要な要素であり、日本には多様で美味しい食べ物があるため関心がある」「日本料理をより深く理解したい」「日本食が好き」「1日3回食事をするため、関連表現の使用頻度が高く、実用的である」といった、日常生活とのつながりや実用性を重視する声が目立った。

最後に、「夢・将来設計」については、「他の学習者がどんな夢を持っているか知ることによって刺激になる」「人の夢について聞くことで、新しい価値観や概念を学べる」「就職活動や大学院入試の面接対策になる」「自分自身の将来の目標を、より明確に日本語で表現したい」といった、自己理解や他者理解、進路準備に関する理由が多く挙げられた。

これらの理由をもとに、学習者の関心や実生活との関連性を考慮して、旅行、食べること、夢・将来設計の3つの話題を授業で扱うこととなった。

4.2 研究課題2に対する成果

研究課題2は、日本人大学生がある「話題」で会話するとき、どのような語彙・文法形式が特徴的に出現するのか、であった。

以下に一例として「夢・目標」「人生・生き方」の話題で特徴的に出現した語彙・文法を示す。

表2 「夢・目標」「人生・生き方」の話題で特徴的に出現した語彙・文法(一部)

「夢・目標」		「人生・生き方」	
名詞	動詞	その他	動詞
夢	憧れる	ていく	出来る
仕事	食える	やっぱり	生きる
海外	起こす	凄い	出会う
紹介	転ぶ	若い	飛び付く
ミスチル	その他	大事	考える
食べ物	~たい		働く

これらを抽出したJ-TOCCは、最近の大学生同士の会話が収録されている(2018年~2019年)ことから、留学生にとって身近な日本語会話データとしてタスク作成に利用可能であり、タスクにターゲットを組み込むことはさほど困難ではないことが分かった。また、学習者に特徴語の説明をすると、モチベーションがあがる様子が見られた。一方で、話題によって、特徴語数が異なる、レベルが多様であるなどの難しさも見られ、タスク制作を行う教師側の技量もある程度必要になると考えられる。

4.3 研究課題3に対する成果

研究課題3は、研究課題1、2に基づき作成した「話題別タスク教材」は、計画通りに機能し、学習者の動機を高めるか、であった。研究課題1、2に基づき作成した話題別タスクのシラバス(一部)は表3通りの通りである。このシラバスに基づき、教材を作成して実践を行なった。具体的な実践については小口(2023)に記した通りである。

学期末の自由記述アンケートから、学習者のニーズに合わせた「話題」の選定を行ったことに対して「It was especially interesting to learn because the teacher focused on the topics we as students wanted to learn, thus motivation to learn was always present. (特に、先生が私たち生徒の学びたい話題にフォーカスしてくれたので、学ぶ意欲が常に湧いてきて興味深かったです。)」という肯定的なコメントが寄せられた。

毎回の授業後のコメントからは、例えば「食べること」という話題について、「やっぱり食べ物についてのことみな興味があります。」「日常生活で役に立つと思います。」などの声が聞かれた。「旅行」という話題については「紅葉狩り」この言葉は初めて知りました。たくさんの単語が習いました。とても役に立つと思います。」などの声が聞かれた。授業を受講する学習者の二

ーズに合わせて話題を選ぶことは、学習者自身が動機付けを維持しながら学びたいことを学べることは大きなメリットであると評価できる

また、『話題別日本語語彙表』を利用することで、大量の語彙リストを前に途方に暮れる学習者に対し、優先順位の高い語彙を示すことが可能になったことは非常に大きな成果であり、学習者に対しても一定の説得力を持つと考える。また、タスク作成や授業計画の段階で教師が優先すべき語彙を「教師の勘どころ」以外の指標を用いて把握し、学習者に示すことができることも非常に有用であった。

表3 話題「食べること」から作成したタスク・シラバス(一部)(小口 2023:238 表3)

回	主なタスク	認知プロセス
2	日本の旬の食材についてリストアップし、母国の旬の食材と比較した作文を書く。母国の旬の食材の食べ方を共有し、比較する。	比較する、 個人的経験の共有
3	自分の生まれ育った地域の郷土料理をクラスメイトに紹介し、「思い出(おふくろ)の味」を共有する。グループで食べてみたい郷土料理のランキングをする。	個人的経験の共有、 並べる
4	郷土料理について、調理方法が似ているクラスメイトを見つけて、相違点・類似点をリストアップする。 クラスメイトを国に招待した時、連れて行きたい飲食店のリストを作り、理由を説明する。	比較する、一致させる、 並べる
5	「地産地消」という言葉が生まれた背景を知り、自国の状況と比較しながら、食を取り巻く問題の解決策を考える。東広島市の「地産地消」促進のため、食材とアイデアを考える。	比較する、 問題解決、 創造的活動

4.4 研究課題4に対する成果

研究課題4は、漢字圏出身の学習者が、留学生活において遭遇するのはどのようなタスクかを明らかにすることであった。

主な成果として、日本国内の大学に在籍する約80名の留学生在が日本で遭遇したタスクを6ヶ月間収集し、以下の内容を明らかにした。(1)来日時、学習者は日常的・アカデミックな場におけるインターアクションに関するスキル、論文やレポート執筆を日本語で行うスキルの獲得を期待していることが分かった。(2)来日後の6ヶ月で学習者が実際に遭遇するタスクは、日常的なクラスメイトとの雑談、生活に必要なラベルなどのカタカナの読解、方言話者とのやりとりで苦労を感じていることが分かった。(3)来日後の6ヶ月で学習者が実際に遭遇するタスクについて、AIを日本語学習に活用し、実際の日本人との会話に備えていること、「遠慮」など言語文化のギャップに戸惑っていること、対中感情への意識がタスク達成の妨げとなることがある様子などが分かった。

<参考文献>

小口悠紀子(2023)「J-TOCCと『話題別日本語語彙表』を活用したタスクベースの日本語指導」

中俣尚己(編)『話題別コーパスが拓く日本語教育と日本語教育学』229-248、ひつじ書房

中俣尚己(2021)「日本語話題別会話コーパス：J-TOCC解説資料」

(http://nakamata.info/database/j-tocc_document.pdf)

中俣尚己・小口悠紀子・小西円・建石始・堀内仁(2021)「自然会話コーパスを基にした

『話題別日本語語彙表』、『計量国語学』33、pp.194-204

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小口悠紀子・帖佐幸樹	4. 巻 13
2. 論文標題 初級日本語教科書で「てあげる」はどう扱われているのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語 / 日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 137,152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 帖佐幸樹・小口悠紀子	4. 巻 32
2. 論文標題 ちょっと{外(に)出る/出かける/外出する}ね 外への移動を表す類義表現の使い分け	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 1,8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件/うち国際学会 6件）

1. 発表者名 小口悠紀子
2. 発表標題 「教室にリアルを持ち込むー第二言語のコミュニケーション能力を育てるにはどうすればいいのー」
3. 学会等名 ことばとことばの教育セミナー（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小口悠紀子
2. 発表標題 住民参加型の防災タスク実践 - 「住みごこち」から「住みごたえ」「住みこなし」を支援する日本語教育の提案 -
3. 学会等名 17th EAJS International Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 南浦涼介, 小口悠紀子, 櫻井千穂, 川口広美, 川上さくら, 斉藤 仁一朗
2. 発表標題 言語的文化的に多様な10代の子もたちに向けた教材開発 言語教育分野と教科・市民性教育分野に携わる者の協働過程を中心に
3. 学会等名 日本語教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 KOGUCHI YUKIKO
2. 発表標題 Does it 'Work'? Evaluating Tasks in an Intermediate Japanese Language Class at Japanese University
3. 学会等名 9th International Conference on Task-Based Language Teaching (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 KOGUCHI YUKIKO
2. 発表標題 Task-based and Needs Analysis: What Communicative Tasks Do Chinese Students Encounter in Japan?
3. 学会等名 Task-Based Language Teaching in Asia (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 小口悠紀子・高橋恵利子・柴田智子・中窪高子・半沢千枝美・山下順子
2. 発表標題 米国と日本におけるタスクベースの言語指導 (TBLT) の実践
3. 学会等名 the 2024 International Conference on Japanese Language Education (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 小口悠紀子
2. 発表標題 日本語母語話者は「てあげる」をどう使っているか 日本語話題別会話コース J-TOCC の分析から
3. 学会等名 中国語話者のための日本語教育研究会（国際学会）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 中俣尚己、小口悠紀子、石川慎一郎、太田陽子、加藤恵梨、小西円、澤田浩子、清水由貴子、建石始、橋本直幸、堀内仁、森篤嗣、山内博之	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 話題別コースが拓く日本語教育と日本語学	

1. 著者名 小口悠紀子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 『一語から始まる小さな日本語学』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------